

獲ノ海が消える

海にうごめいているのが夜目にもはつきりと見える。

月のない水島灘を東へ、今しがた御蔵朱を船一杯に積みこんで、玉島湊から大阪

へ向う一隻の千石船。

突然パタリと風がないで、白い大きな帆がだらりとたれ下がりに、船足がにぶる。……ハテ、どうしたのかといぶかる頭上には、いつしか黒雲がたれこめて、雷鳴のとどろく暗黒の海上……。

黒い海面の底から「杓を貸せえ、杓を貸せえ」……うめくような声がひびいてくる。

五百年前の昔、水島合戦に散った源平の武士たちの怨霊——世に船幽霊という。

「杓を貸せえ、杓を貸せえ……」ぶきみな声は千石船を取り巻き、細く青白い手頭がニヨキニヨキと幾百幾千と数知れず、杓を求めて黒い

おそろしさに耐え切れなくなった船乗りの人々が、そばにあった一本の杓を白い手のまん中目がけて投げこんだ。

暗い海から一本の白い腕が抜け出して、すると海を走ったかと思うまもなく杓をつかんだ。杓をつかんだ一本の手が船ばたに近づいて来た……と思う瞬間、数知れぬ無数の手がそれそれ一本の杓を持って、次々に船ばたにやっ来て取り囲む。

「水がほしい、水がほしい。ふるさとの井戸の水……」きれいな歌声に船乗りたちはうつとりとなる。

「ざざあー、ざざあー……」無数の手が杓で海水を汲みこむ。たちまち大きな千石船もぐうーと傾く……、もはや沈むかと思われた。

その時、年老いた一人の船頭は一本の杓の底

をぶち抜くと、やにわに無数の手の群の中へ投げこんだ。

なんとも不思議、さしもの大夕立もぴたうと止んだ。そして白い無数のぶきみな手も、かき消すように消えたかと思う間も無く、順風は帆を一杯にはらませて、船は走るように東へ向って進んで行った。

この後、水島灘にうかぶ小さな岩島の一つは杓島と呼ばれるようになった。

「杓を貸せえ」又は「船幽霊」の語は、すでに室町時代(十四世紀後半から十六世紀前半)ごろから存在していたとも伝えられている。

また、現在も水島港沖の水島灘に、大杓島小杓島と名付けられた小さい島が横たわっている。

近世の中海の変化

玉島湊が隆盛を極めたのは元禄年間(十七世紀末から十八世紀初)といわれ、千石船の出入りでにぎわい、港内は千石船の帆柱が林立していたと伝えられている。

江戸時代初期の十七世紀の百年間に吉備の中海は、東は西大寺付近から西は玉島にかけて、干潟の続く遠浅の海と化し、これを干拓して人工的に陸地化する大工事が、東部の吉井川及び旭川の河口周辺では備前岡山藩池田氏によって進められ、吉備の穴海は児島湾と変化していった。

一方、西部では、猛威をふるう高梁川の沖積活動はその河口周辺の遠浅化の速度を早めて、干拓を容易にさせる条件もそろい、江戸時代初期のわずか五十年間ほどの間に、備前藩水谷氏並びに岡山藩池田氏によって現在の玉島平野を出現させた。(図4)

これによって「甕ノ海」は完全に姿を消すこととなる。

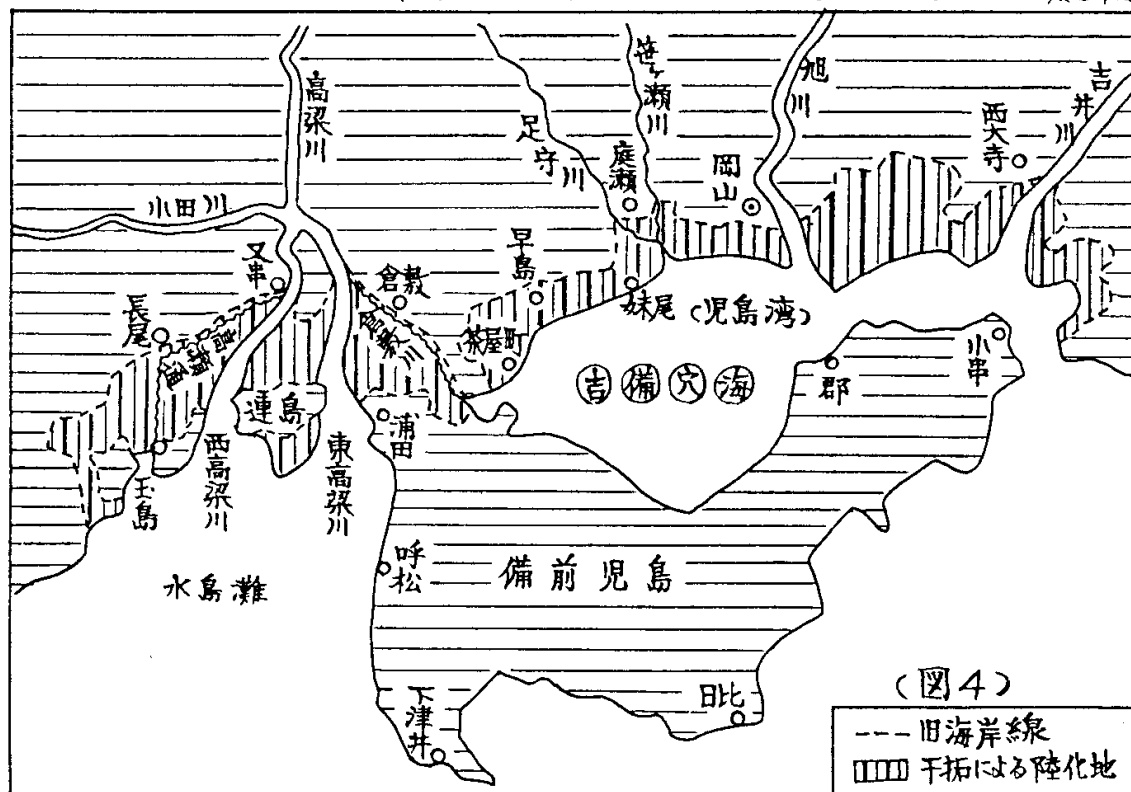
その後、江戸時代末期から明治にかけて、興除・藤田の大干拓地が造成されて、児島湾はいよいよせばめられ、昔日の海の姿を全く失うこととなる。

さらに高梁川河口では江戸末期以降の福田・連島沖、乙島新開などの干拓、そして昭和三十年代以降の水島沖の大規模埋立造成工事等によって、県南の姿は大きく一変して現在に至ることとなるのである。



須恵双耳壺 かつて、邑久郡長船町大字磯上字油杉の山林で行われた牧場造成の際に、4基の須恵器古窯跡が発見され、この双耳壺はその時出土したものである。備前焼初期にも同形の壺が焼かれており、須恵器工人の伊部への移住を考えさせる。岡山県立博物館蔵。

18世紀初（江戸時代中期）ごろの吉備の中海周辺想定図（元・川・川・渡辺作図）



(図4)

--- 旧海岸線
 〰〰〰 干拓による陸化地

高梁川河口の変化と

倉敷村の誕生

年前の天正十年（一五八三）には、豊臣秀吉が備中
高松城を水攻めにして城主清水宗治を降してい
る。そして、本能寺の変で織田信長が明地光秀
に殺された時でもある。

このころへ十六世紀末の高梁川は酒津山の
ところで、西の流れは船穂又串付近で、東の流
れは酒津付近でそれぞれ河口を作り、倉敷平野
は当時深く入りこんだ海であった。

この海を古代には阿知海あちのうみとも呼んでいたが、
当時はすでに高梁川がはき出す土砂によって干
潟が広く続く海と化していて、阿知潟あちがたといわれ
るようになっていた。

ところで、天正十二年（一五八四）、宇喜多秀家
の家臣で庭瀬城主であった岡豊前守利勝の計画

関ヶ原の戦が行

われたのが慶長

五年（一六〇〇）、

これより約二十

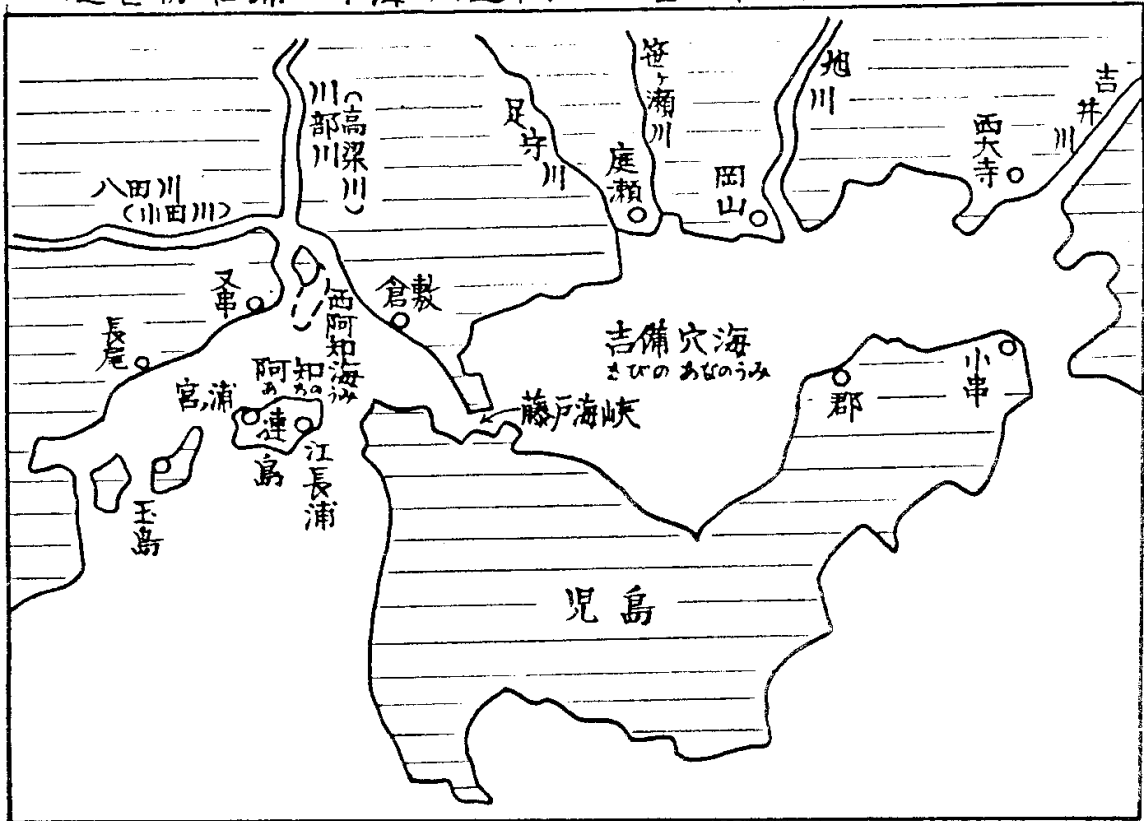
で、その藩士千原九右衛門勝利が工事奉行とし
てへ千原九右衛門は備中高松城水攻めの際、築
堤工事に大きな役割を果たしたと伝えられている
、酒津より下へ浜村へ鶴形山の南方へまで約二
キロメートルの堤防を築いて倉敷を陸続きにし
た。へこの堤防を天正宇喜多土手とも酒津土手
とも呼んでいたようである。

文禄四年（一五九五）には検地を受け、鶴形山を
中心にその周辺の平地を「倉敷村」と命名され
たという。（図5）

こうして十六世紀末には、高梁川の本流は天
正宇喜多土手に沿って向山の麓を流れて藤戸海
峡から吉備の穴海へと流れこんでいたので、な
いかと考えられ、川は土砂を堆積し干潟を作り
ながら次第に川筋を西へ移動させていったと想
像している。

また、西の流れは酒津山に連なる南方の沖合
に出来たいくつもの三角洲や沖洲の間を気ま、
に流れ抜けながら、干潟を次第に拡大していっ

近世初吉備の中海周辺図（16世紀末ごろの想定図）（図5）



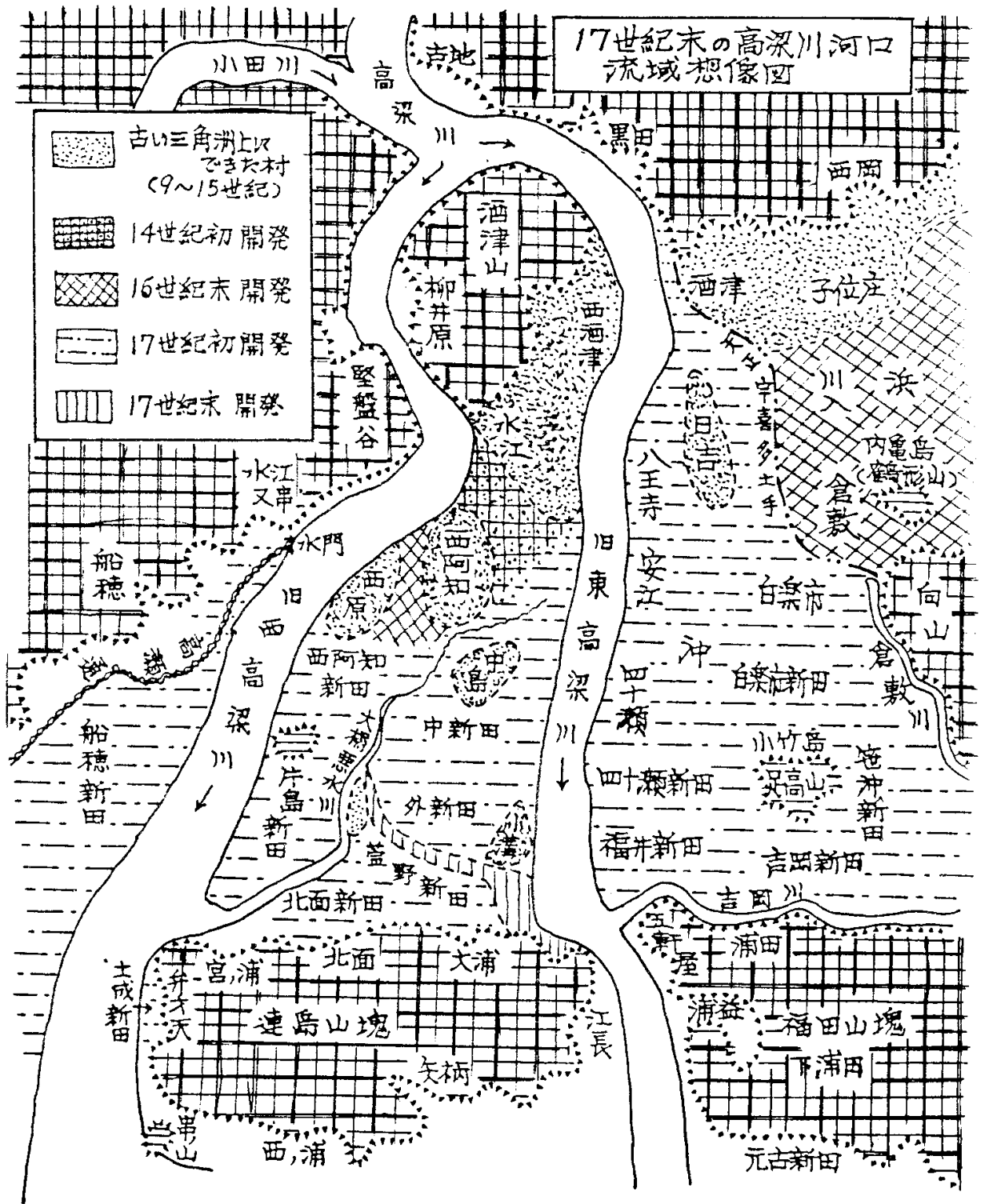
（H元・5・16 渡辺作図）

たものと考えられる。

ちようどこのころ、宇喜多土手築堤の功によつて西阿知に居住地を与えられた千原九右衛門の存在は、多分に川内地方の干拓開発に大きな推進力となり影響を与えたことであらうと想像できる。

そして十七世紀初めには、連島が西阿知地方と陸続きになり、東西高梁川に抱かれた大きな沖の島と化した。（図6）

したがって高梁川の西の流れは十七世紀初めになると、西へ大きく曲りこんで船穂・長尾地域の沿岸にそって流れるようになり、船穂・長尾沖に大きな干潟を作り、甕ノ海をその東の方から浅海化していったと想像できる。



年代	地名	備考
天正十二年(1584)	酒津築堤(天正字喜多士手)	倉敷村誕生
元和年間(1615~1623)	西酒津村・水江村	
元和六年(1620)	八王寺村・安江村・四十瀬村	沖村・白糸市村・笹沖村
寛永年間(1624~1643)	中島村・西阿知村・西阿知新田村	(当初茅野新田と呼ばれた)
正保年間(1644~1647)	西原新田(当初西阿知新田)	船穂新田(正保二年)
寛永・明暦	北面新田(寛永開闢1629年)	(明暦開闢1656年) 大浦沖は寛文五年(1665)天和元年(1681)に出来る
延宝年間(1673~1680)	中島新田・片島新田	川溝周辺は承応三年(1654)ごろに出来たという
寛永十年(1633)	福井新田・吉岡新田	

鹽, 海開発年表 (江戸時代初期)

年代	開発地名 (領主)	備考
寛永元年 (1624)	長尾内新田 10ha (松山藩池田長幸)	
寛永19年 (1642)	長尾外新田 30ha (松山藩水谷勝隆)	
正保2年 (1645)	船穂新田 260ha (松山藩水谷勝隆)	
正保3年 (1646)	勇崎内新田 50ha (松山藩水谷勝隆)	塩田として開発し, 当初は元次新田とよんだ。(製塩高約87石)
万治元年 (1658)	島地開拓地 (岡山藩領)	村受として山を拓き海を埋めた 寛文4年(1664)の検地で2.5ha
万治2年 (1659)	玉島新田 219ha (松山藩水谷勝隆)	作事奉行・大森元直 寛文5年(1665) 玉島・爪崎・上成 堤下・水溜・港町を合わせて玉島 新田村を設立し, 大森元直を庄屋 とする
寛文元年 (1661)	上竹新田 105ha (岡山藩池田光政)	上竹沖及び道口沖
寛文6年 (1666)	勇崎外新田 60ha 黒崎内次新田 32ha (松山藩水谷勝宗)	作事奉行・中塚長太夫 塩田として開発, 当初は勇崎次新田 とも云い, また塩次村ともよんだ。
寛文10年 (1670)	阿賀崎新田 127ha (松山藩水谷勝宗)	作事奉行・佐治三衛門 延宝4年(1676) 検地し阿賀崎新田 村が設立される。
	七島新田 147ha	
	道越新田 115ha	
	八重新田 41ha (岡山藩池田光政)	

時代	開墾地名 (領主)	備考
寛文10年 (1670)	占見新田 75ha 鴨方新田 里見新田 (岡山藩池田光政)	新田の開墾にともなって松山藩領と岡山藩領との境界を定めた。 東西に張った糸は八重の西端を糸本(糸元田)とし、島地の東端を糸崎(糸崎土手)として結び、南北には北川沖の糸本から新開潮止め土手(羽黒山)までを結ぶ。 南北の糸に沿って松山藩の方で用水路を設け村境とした。 (この用水路が高瀬通として)も利用された
延宝3年 (1675)	柏島森本新開 22ha 勇崎押山新開 10ha (松山藩水谷勝宗)	作事奉行 中塚長太夫
元禄元年 (1688)	柏島主水町新開 3ha (松山藩水谷勝宗)	

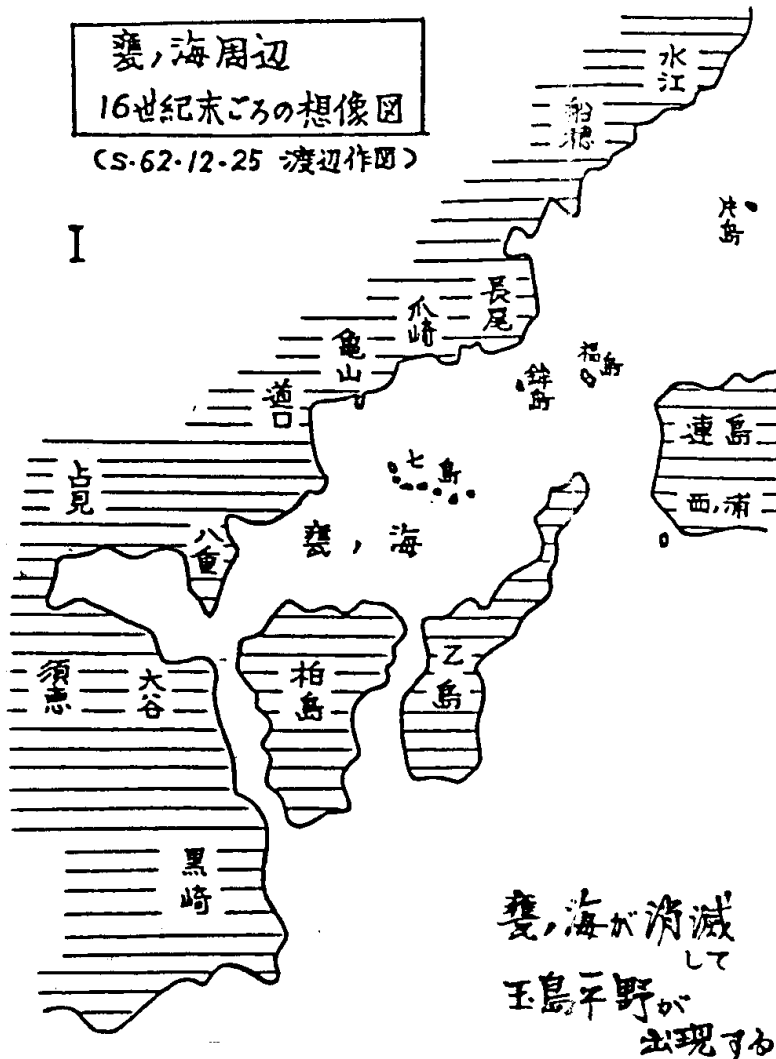
松山藩領新田計 823ha 約1万石の増収

岡山藩領新田計 485ha (鴨方・里見新田不明) 約0.8万石の増収

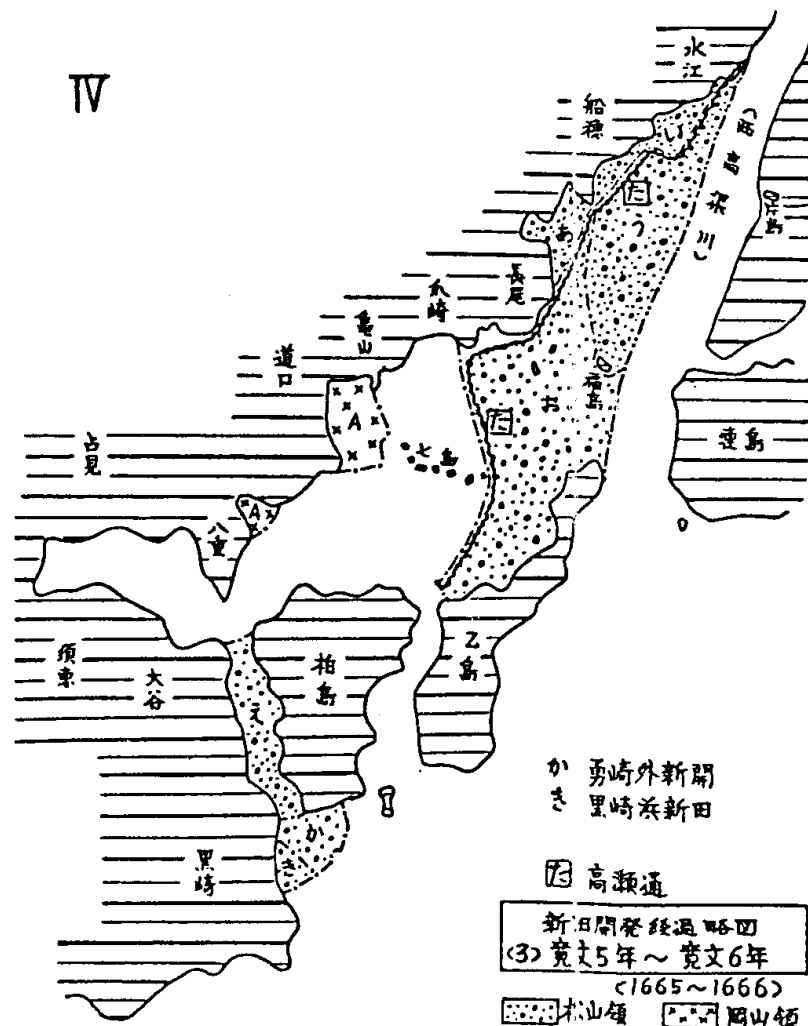
(江戸時代末期開墾分)

慶応元年 (1865)	乙島内新開 120ha (幕府直轄地)	作事奉行 守屋勝太郎 (当初は岡新開といた)
----------------	------------------------	---------------------------

斐ノ海周辺
16世紀末ごろの想像図
(S-62・12・25 渡辺作図)



斐ノ海が消滅して
玉島平野が出現する

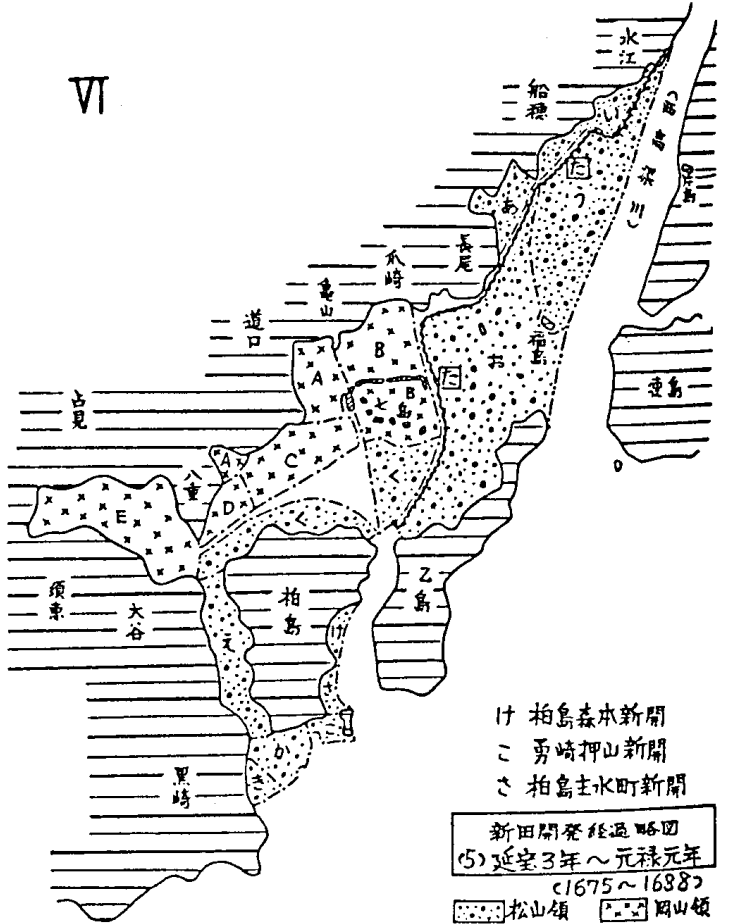
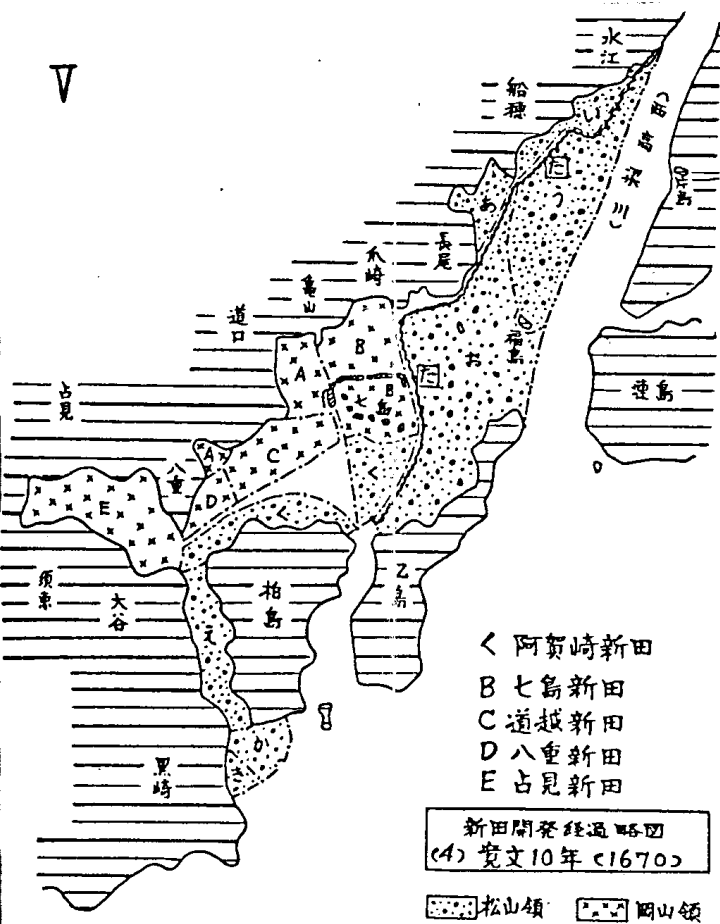
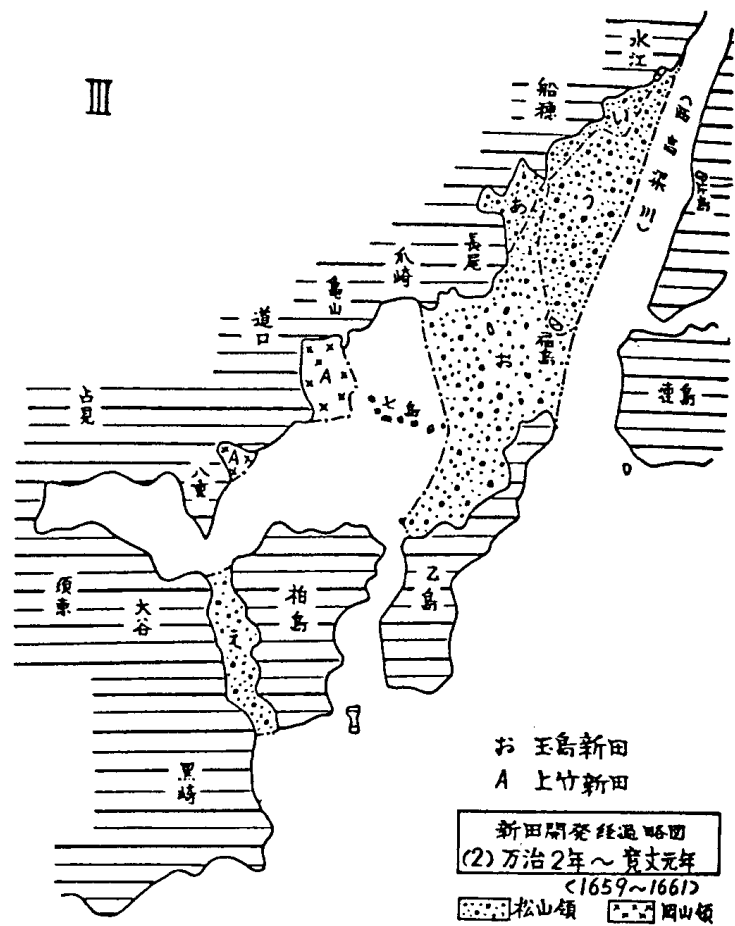
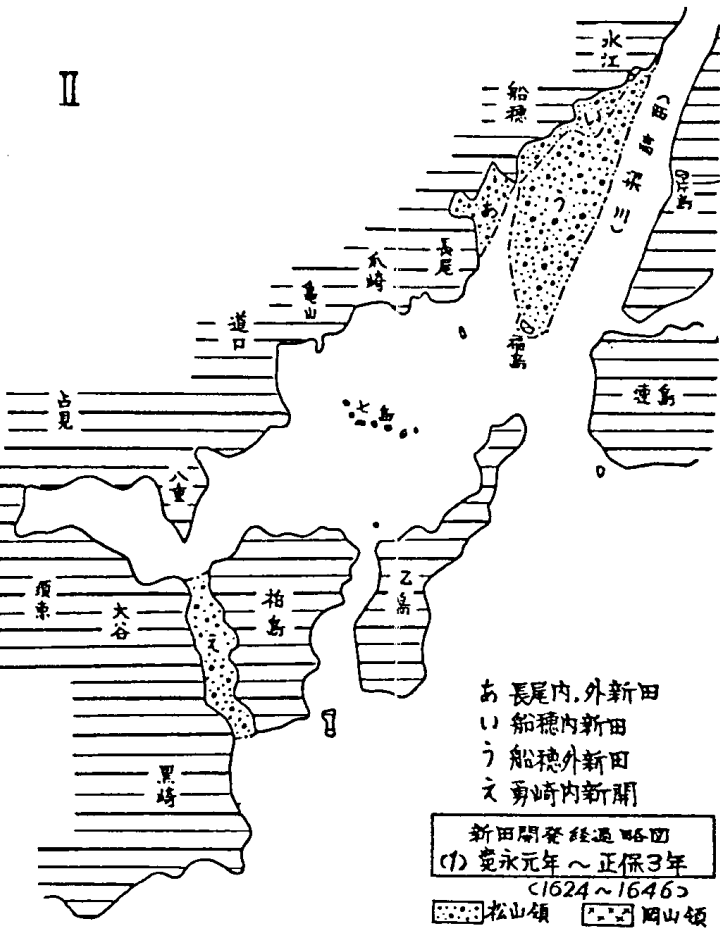


かき 勇崎外新開
き 黒崎浜新田

高瀬通

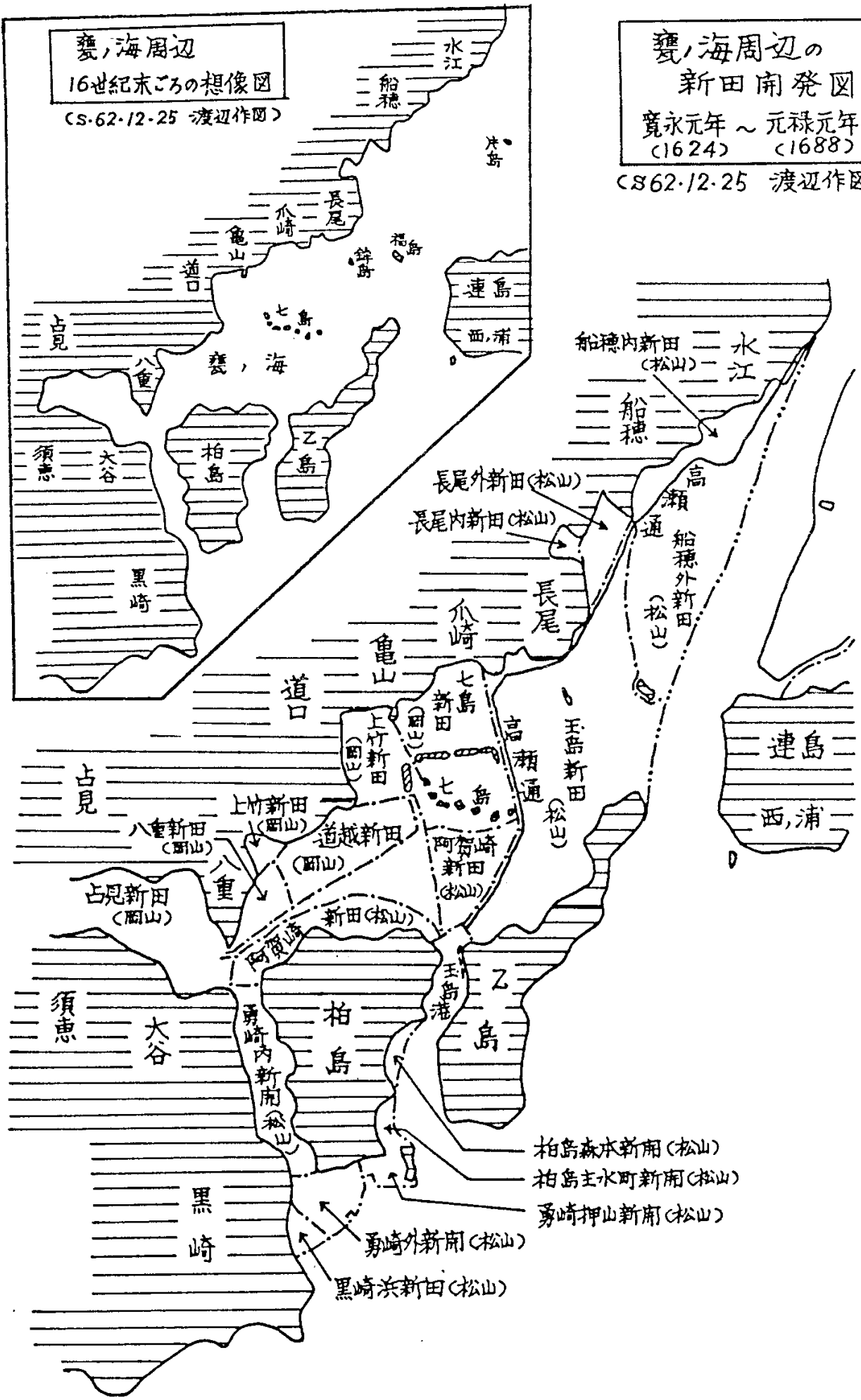
新田開発経路略図
(3) 寛文5年~寛文6年
(1665~1666)

● 松山領 □ 岡山領



甕,海周辺
16世紀末ごろの想像図
(S-62-12-25 渡辺作図)

甕,海周辺の
新田南発図
寛永元年 ~ 元禄元年
(1624) (1688)
(S62-12-25 渡辺作図)



甕ノ海干拓物語

「水谷^{みずや}氏による干拓」
十七世紀の初めごろ
になると、福島・七

島など甕ノ海に点在する島々の周辺一帯は、潮が引くと泥沼のような干潟が一面に広がる海と化していた。

そのころ船穂・長尾村の領主であった備中松山藩主池田長幸は、この干潟に目をつけ寛永元年（一六四一）長尾内新田十町歩（一〇ヘクタール）を干拓した。

その後、關東の常陸国から松山藩主として移封された水谷勝隆は、土木・築城等にすぐれた才能をもち、その手腕と技術を生かして小手調べに寛永十九年（一六四三）、前任者池田長幸がつくった新田の外側に長尾外新田三十町歩（三〇ヘクタール）を干拓した。

この干拓の成功に気をよくし自信を得た勝隆は、甕ノ海に広がる干潟にとび石のように点在している島々を巧みにつないで干拓していくこ

とを考えて、本格的な干拓事業にのり出したのである。

「玉島平野の出現」 松山藩主水谷勝隆は、長尾外新田の東部に広がる広大な干潟と、その先にできた西高梁川の自然堤防に目をつけ、これを東側の潮止堤防に利用し、南側は福島を足がかりとして土生^{はぶ}付^づまで約二・五キロメートルの潮止堤防を作り、正保二年（一六四五）船穂新田二百六十町歩（二六〇ヘクタール）を干拓する大工事を完成させた。

引続いて正保三年には、黒崎と柏島との間に細長く横たわる海峡部を、北と南にそれぞれ堤防を築いて勇崎内新田五十町歩（五〇ヘクタール）を拓いた。

いよいよ本命の干拓大事業の推進に当たって、水谷勝隆は明暦元年（一六五五）、同じく参勤交代で江戸詰めであった岡山藩主池田光政へ、備中領の内海百間ばかり堰止むれば、備中領にも

備前領にも多くの新田出来申すため、何分の惣力願いたし」と申し入れたところ、「昨年来の（承応三年・二六五四）水害復旧の諸普請に追われ、新田開発のことなど考え及ばぬ」と池田光政は断わった。

そこで水谷勝隆は松山藩独力で着工することに決意し、大森元直を伴事奉行に命じ藩の財力を傾けて玉島新田の干拓に取り組んだ。

福島の南側へ長く延びていた西高梁川の自然堤防を東側の潮止堤防とし、そして西側に新しい潮止堤防——乙島の北部（矢出付近）を基地として、阿弥陀山（羽黒山）から七島の東端を通って瓜崎に至る三キロメートルの大堤防——を築き、万治二年（一六五九）二百二十町歩（三二〇ヘクタール）の新田を拓いた。

さらに勝隆は、新田の用水確保のために、いわゆる「高瀬通」を万治二年に着工した。

現船穂町又串を出発点にして、船穂・長尾・瓜崎を経て干拓堤防上を伝って阿弥陀山東端の「舟だまり」まで、延長九キロメートル・幅四メートルの澗河を数年かけて掘り抜き築き上げて、又串に設けた水門から西高梁川の水を引き入れることに成功した。

『高瀬通』の建設に当っては、先に干拓事業の惣力を断わられ、その上、潮止堤防作りには多量の土を必要とするので、岡山藩領である七島のうちの島一つを分譲してもらおうというひそかな望みも絶たれた（後述・七島物語参照）松山藩では、岡山藩領との境になる水路の土手は両側から石垣でしっかりと巻き、水路の底はシツクイでつき固めて、亀山・道口沖に広がる岡山藩領の新田地帯へは一滴の水ももらさないという工法を駆使して、用水路を築いたといわれている。

また、余勢をかって引続いて寛文年間(一六六六—一六六九)には、乙島新田の開発を計画したが、対岸の川内十一ヶ村組合が大川(西高梁川)の水はけが悪くなるに強硬に反対したために実現はしなかった。

——二百年後の幕末になって、幕府によって乙島内新開として開発された——

水谷勝隆の子・勝宗は父の仕事をついで、寛文十年(一六七〇)、佐治三衛門を作事奉行として阿賀崎新田百二十七町歩(一三七ヘクタール)を拓いた。かつては甕ノ港として栄えた亀山や道口も、このころには干潟の出現でとくに港の機能を消失してあり、完成した玉島新田の地続きということで、松山藩ではなんの気がねもなく、柏島の北東部丸山と阿弥陀山(羽黒山)との間に長さ三百メートル、幅五十三メートルという頑丈な堤防を築いて締切った。

この潮止堤防上に新町と呼ばれる問屋街を作

り、千石船が直接横づけできることになって、玉島湊の繁栄が開ける基礎ともなっていた。

甕ノ海の終焉

甕ノ海の東部に広がっていた干潟のすべてが松山藩領として干拓され、甕ノ海の西部奥深くまで取り残された広大な干潟は岡山藩の飛び領地先の海面ということであつた。

寛永九年(一六三三)、池田光政は鳥取藩主から国替えにより岡山藩主として着任してきた。

着任当初は、新領国の藩政確立や岡山城下町の町づくり等に専念しなければならぬ状況であつた。

しかし、ようやく藩の体制がととのい、藩政が軌道にのつてきた寛文元年(一六六一)ごろから、本格的な干拓事業に乗り出したようである。

甕ノ海の干拓は寛文元年(一六六一)に、上竹新

田百五町歩（一〇五ヘクタール）を手はじめに、寛文十年（一六七〇）には、七島・道越・八重・占見の各新田計三百七十八町歩（三七八ヘクタール）が出現して完了した。

かくして養ノ海は全く姿を消し、これ以後、養港（又は養江）と名をかえて玉島湊へと引きつがれていくこととなる。

寛文十二年（一六七二）に池田光政が隠居し、長男綱政が二代藩主を継ぐに当って、二男政言を鴨方藩主として分家させた。

これにあわせて、七島・道越・八重・占見の各新田は鴨方藩領として組みこまれることとなった。

